

ディベートとの出会い

手ごたえのない国語の授業

まだ20代後半の頃です。中学3年生の国語の授業を担当していました。生徒は言われたことには取り組んでいます。しかし、手ごたえがありませんでした。「これは違う。自分のやりたい授業は違う」こちらが焦れば焦るほど、生徒は受け身になっていくような気がしました。自分としては、一生懸命やっているつもりでした。それは分析すると、ワークシートをもとに、一生懸命説明していたのだと思います。「これではいけない。3年生には時間がない」そんなことを考えていました。

救世主「ディベート」現る

そんなある日、何かの教育雑誌で「ディベート」というものに出会いました。それまでも名前ぐらひは聞いたことがありました。読んでみて、すぐに「これだ」と思いました。早速、ディベートに関する書籍を購入することにしました。すると、教室ディベートや授業ディベートというワードが入った書籍が複数世に出ていることがわかったのです。ディベートを授業に取り入れる際の羅針盤を手に入れた思いでした。

最初に「これだ」と思えたのはディベートですが、その後も同じようなことがありました。群読、ジグソー学習、ワークショップ、バザール方式、一枚ポートフォリオなどです。改めて振り返ってみると、どんな国語の授業をしたかったのか、どんな生徒を育てようとしてきたのかがわかってきました。

日本を支える表現者を育てたい

最初から、計画的にそうしてきたわけではありません。そのとき、そのときで、国語の授業のことで悩み、考え、実践してきたことに、共通点というべきか柱のようなものがあつたことに、自分で気づいたということです。

それは、タイトルを付けるとしたら、「表現者を育てる国語の授業」とでもなるでしょうか。自分の考えや思い、自分で読み取ったことを、書いたり話したりできる生徒を国語の授業を通して育てようとしてきたのだと思います。そこには、大げさに言うと、「次代の日本人を育成する国語の授業」という思いも込められています。きっと、海外の日本人学校での経験が影響しているのでしょう。

若い中学国語教師とともに

これから、この「国語の窓」の紙面を使って、自分の実践を振り返っていきます。そこには、内容掲載の方針として、「中学国語教師のためのガイドブック」という視点を入れていきます。これからの国語教育界を支えていく皆さんにとって、少しでも役に立つものになればという思いです。自分が先輩方に教えていただいたことへの感謝の思いを込めながらとなります。

中学校での実践が中心となりますが、私には幸い、小学校と高等学校そして海外の日本人学校での経験もあります。加えて、県教育センターでの勤務を通して、県内の多くの先生方と接してきた貴重な財産もあります。これらを総動員して、この紙面を充実したものにしていくつもりです。

まずは、暗中模索、試行錯誤の状態だった私の国語の授業に、一筋の光明をもたらし、授業活性化の起爆剤となり得た「ディベート」の実践を紹介していきます。